20年4月22日(火)毎日新聞(朝刊26面)

なにわアカデミー

3 「笑いの科学」ゼミ(関西大学社会学部)

「笑い」は人をリセット

健康との関係にも役立つ

お笑いの街・大阪で、「笑いを科学する」変わった先生がいる。新入生やサークル勧誘の在校生でにぎわう、吹田市の関西大学千里山キャンパスで教壇に立つ、社会学部の木村洋二教授(60)=コミュニケーション論=だ。口元を覆うひげに、奇抜なヘアスタイル。研究内容に負けず劣らず容姿も個性的だ。

木村教授が中心となった同大の研究チームは今年2月、人の笑いを数値化できる測定装置の試作品を公開した。木村教授は、笑った時だけに起きる横隔膜の特有の振動に着目。胸や腹に付けた電極で横隔膜の動きを計測し、独自ソフトで解析。笑いの量を「aH(アッハ)」という単位を用いて測った。顔の筋肉の動きも合わせて計測することで、「大笑い」「含み笑い」「愛想笑い」「作り笑い」など、笑いの質も判別可能だという。

数値化できる装置を試作

青森県八戸市出身。笑いに関心を持ったのは、京都大学で社会学を学んだ後、関西大学で助手となった79年のことだった。木村教授は「助手時代に自分でとったキノコを食べて、笑いが止まらなくなった」といい、それ以来、なぜ人は笑うのかを研究することにしたという。木村教授は「笑う動物は人だけ。笑いと人類の進化とも関係があるはずだ」と話す。測定装置の開発で笑いの量を数値化すれば、人が笑う理由や仕組みの解明につながるだろうと予測する。

人にとって「笑い」とは何なのか。木村教授は「精神をニュートラルギアに戻す、リセットさせる役目を持つのが笑い。まじめさと同じくらい重要なんです」と説く。その上で、「『自分はアホや』と上手に笑える人は、失敗や挫折、ストレスなどの脅迫観念から上手に逃れられ、リスタートできるんです」と話す。

笑いが数値化できるようになることで、特に笑いと健康の関係を研究するのに役立つと、木村教授は主張する。例えば、赤ちゃんと母親の笑いを測ることで家族間のコミュニケーションが健全かを調べたりできる。また、人体の免疫機能に笑いがどう作用しているかなどを探ることも可能だという。

笑い測定装置の利用法について議論する木村洋二教授(右)とゼミ生

木村教授の「笑いの科学」ゼミでも現在、測定装置が実用化された場合の利用方法を研究中だ。14日にあったゼミでは、3年生約20人が独自のアイデアを披露した。

上津有美子さん(20)のアイデアは、タクシーにaHを表示するというもの。上津さんは「タクシー運転手もおしゃべりの楽しい人から寡黙な人までさまざま。会話を楽しみたい時はaHの高いタクシーに乗り、二日酔いの時などはaHの低いタクシーに乗ればいい。運転手のサービス向上にも役立つのでは」と話す。将来テレビ番組制作の仕事に就きたいという、小林愛さん(20)は、バラエティー番組で測定装置を利用し、新しいお笑い番組ができないかと提案した。また、平岡秀章さん(21)は卒論研究に測定器を使いたいといい、「明石家さんまの対人コミュニケーションを分析したい。競争の激しい芸能界でなぜ生き残れるのか解明したい」と意気込む。

測定装置は、携帯電話サイズに小型化・無線化し、年内にも「わらおっち」の名称での販売を目指している。木村教授は「『今日はあまり笑わなかったから、もう少し笑っておこうか』というふうに、笑い版の万歩計として利用できる日が近いかもしれませんね」と話した。【村松洋】

「笑いを科学する」シンポジウム開催　5月10日午前10時半から、吹田市山手町の関西大学千里山キャンパス内「BIGホール100」で。入場無料。健康、脳科学、心理学などと、笑いの関係を探るシンポジウムを開催。笑い測定装置を使用したワークショップもある。問い合わせは同大(06・6368・1121)。